

【論文】

## 遥かなり台湾

独立運動にかけた台湾人学者40年ぶりの帰国譚

本誌編集部 上島嘉郎

雨雲の中を、揺れながら機体が降下してゆく。機内アナウンスが、間もなく台北・中正国際空港に到着することを告げた。東京から約三時間の空の旅である。

“蒋介石の治国を嫌って、足掛け四十年もの間帰国しなかった人が、やっとの思いで降り立つ空港が「中正公(故蒋介石)」の名を冠している...”

その人の帰国を、「浦島太郎が帰ってきた」と伝える台湾の新聞「自由時報」をバッグに仕舞いながら、私はいささか複雑な心境だった。

“その人”とは、昭和三十六年に日本に留学してから、台湾独立運動に身を投じたために、台湾当局からパスポートを剥奪され、一九九二年の李登輝政権によるブラックリスト解除後も帰国を拒否し続けてきた東京理科大学教授の周英明さんのことだ。辛口の評論家として活躍する一方でJET日本語学校(東京・北区)の校長をこの春まで務めていた金美齡さんの夫君である。

「台湾は、台湾人の手によって独立すべき」という考えを持つ周英明、金美齡のお二人は、李登輝政権が誕生するまでは、台湾政府(国民党)にとって危険極まりない“政治犯”だった。

それが李登輝前総統の民主化・自由化を経て、陳水扁政権の誕生を潮時に、初めて夫婦そろって、祖国への里帰りを果たすというので、私は厚かましくも、その旅に同行させていただいたのである。

台湾独立運動というのは、なかなか分かりづらい。いったい何からの独立なのか。それは大東亜戦争における日本の敗戦後、蒋介石の国民党政権が大陸から台湾島にやってきたときから始まる。台湾独立建国連盟主席の黄昭堂さんの言葉を借りれば、「国民党は台湾を“侵略者”から解放したのではなく、新たに占領した。ひどい統治だった」。そこで台湾人は、「国民党政権はいらない。台湾は台湾人の手で国づくりをする」と考えたのである。

ここには二重の意味がある。一つは大陸からやってきた中華民国(外省人)の支配からの独立であり、もう一つは、その中華民国を台湾島に追いやったうえで、「一つの中国」を主張して台湾人を併呑しようとする中華人民共和国からの独立の確保・維持である。前者については、初の台湾人(本省人)総統だった李登輝さんから、これまた生粋の台湾人である陳水扁さんにこの三月の選挙によって政権が引き継がれたことで、さらに前進したと言ってよい。

ただ陳水扁さんの与党である民進党は立法院(国会)では少数派であり、外省人による反発が霧散したわけでもない。依然として国民党は健在である。台湾が二つの意味で独立を達成すれば、彼らは戦後ずっと維持してきた特権を失うことになる。共産主義が嫌で大陸を出てきたはずなのに、彼らには潜在的な母国としての中国があって、それを自分たちの背景として利用するために統一の旗を後生大事に掲げ続けている。彼らが台湾人の独立運動と対立するのはそのためだ。この意味では周さん、金さんの緊張がすべて解かれたわけではない。

## 日本に似た空気

私たちの乗った中華航空機は、雨粒のシャワーの中、滑るように中正国際空港に着陸した。私にとっては三度目の訪問だが、足掛け四十年ぶりとなる周さんの目に、故郷台湾はどう映るのだろうか。

「いよいよ浦島太郎のご到着というわけね。タイやヒラメを引き連れていきましょうか」と、「自由時報」の記事に目を通していた金さんが悪戯っぽい笑みを浮かべる。タイやヒラメというのは私と、父親の帰郷にぜひ付き添いたいと同行している娘の麻那さんのことか...、ならば金さんは乙姫様だな、などと麻那さんと話しながら、空港ターミナルの動く歩道を乗り継いで、イミグレーション(入国審査)のブースへ向かう。

周さんの表情が硬い。東京の駐日代表処でパスポートの交付を受け、入国に必要な書類は整っているはずだが、とにかく前例がない。案の定、係官とのやりとりが始まった。交わされているのは北京語だろうか。金さん、出迎えの行政院新聞局の陳樹銘さんもやりとりに加わるが、はかばかしくは見えない。

「あなたたちは先に行行って。荷物受け取りの所で待ち合わせましょう」

金さんは、いま台湾総統府の国策顧問だ。その夫君が入国できないということはないだろう。麻那さんに「大丈夫ですよ、きっと」と言葉をかけて、金さんに言われたとおりにする。どのくらい時間がかかったらう。周さん、金さんがそろって出てきた。

「よかったあ」。麻那さんの顔に安堵の笑みが広がった。

「いやあ、心配をかけたけれど、係官が昔なら考えられないほどに親切だったよ。いろいろ書類の不備なところを教えてくれてね。何とか入国させてやろうという気持ちが伝わってきた。偉そうにふんぞりかえっていた昔とはえらい違いだよ。“中華風”じゃなくなっている」

周さんは、少し興奮気味だ。

空港を出る。八月も終わりに近い二十八日、まだまだ暑いと聞かされていただけに、雨模様の台北の涼しさは意外だった。市の中心部に向かう高速道路の車中、周さんは流れてゆく車窓の風景を眺めながら、「日本に似ている」と何度もつぶやいた。それが日本統治時代の名残を指しているのか、それとも周さんのある種の心象風景なのか。

「つまり、空気なんだよ」

周さんはひとりうなずいている。

## 答えに窮する日本人のひとりとして

李登輝前総統が、故司馬遼太郎さんとの対談で語った、「台湾人として生まれた悲哀」ということがずっと気にかかっていた。台湾を植民地として統治した歴史を踏まえたとき、その悲哀に対して心を寄せるのは、日本人の務めだと思わずにはいられない。

司馬さんが、かつて日本人だった蔡昭昭さんという美しい台湾婦人から、

「日本はなぜ台湾をお捨てになったのですか」とたずねられて、

「美人だけに、怨ずるように、ただならぬ気配がした。私は意味もなくどぎまぎした」と困惑する場面が『台湾紀行』の中に出てくる。

日本が台湾を捨てた　それが昭和二十年のポツダム宣言受諾による台湾の放棄なのか、昭和四十七年の田中角栄内閣による「日中国交回復」と「日台断交」なのか、あるいはその両方なのか。

「家族ぐるみのお招かれの席上で、にわかには現代史の話を持ちだすのは無粋」と思った司馬さんは黙ってしまうのだが、昭昭さんはふたたび、

「日本はなぜ台湾をお捨てになったのですか」とたずねる。

「たずねている気分が、倫理観であることは想像できた。考えてみると、彼女の半生をひとことでいえば、水中の玉のように瑩として光る操なのである。こういう人の前では、答えに窮したほうがいいとおもった」

答えに窮した司馬さんと同じような思いを、私も何度か味わった覚えがある。「これは僕のセンチメンタル・ジャーニーだよ」と照れ笑いする周さんに同行することで、“台湾人としての悲哀”と台湾の戦後について、何か自分なりに感じられるものがあればいい。理解よりも、感じることのほうが大切な場合もあるのではないか。それが感じられれば、たとえば日本人のひとりとして、蔡昭昭さんの“気分”に対して、自分なりの答えが見つけれられるのではないが……取材というよりは、そんな漠然とした気分だった。

## 「お国のために」

金さんが“定宿”にされている台北西華飯店に旅装をとく。西欧風に洗練された瀟洒なホテルだ。早速、近くの食堂で開かれた周さんの歓迎会にお招かれする。雨は降り続いていた。

「相変わらず雨男だなあ」とわが身を憂鬱そうにつぶやくと、

「台湾ではね、雨男は“赴雨人”と言って、富戸（富裕な人）と同じ音なの。悪くない気分でしょう」

金さんの機転とユーモア感覚が、こんな一言にも現れている。歓迎会は金さんの女学校時代の同級生が中心となって開いてくれたもので、座はあっという間に打ち解けた雰囲気になった。台湾語の会話が弾む。何とも不思議な感じなのだが、言葉の間はかなり頻りに日本語が挟まれるので、台湾語そのものは分からないにして

も、何となく会話の内容に察しがついたりする。周さんと同年配以上の人からは、日本語で話しかけられる。それもかなり達者な日本語である。「かつて統治し、日本語教育をした」という事実を改めて実感させられる。

その夜、金さんの妹さんの満里さん、夫君の林克忠さん、“老台北” 蔡焜燦さんらによる歓迎会が市内の菜館で開かれた。それぞれみな東京では会っているものの、台湾で会するのは初めてなのである。それに意味があった。「自由時報」を読んでいたのだろう。蔡焜燦さんが、「台湾の浦島太郎は、帰ってきてても昔を知っている人がたくさん残っているから寂しくないでしょう」と声をかけると、周さんは、「亀に乗ってというより、蔡さんに呼ばれてやっと帰って来たという感じがする。総統選挙で陳水扁が勝利した日、家内は投票のため台湾にいて、私は東京でひとり泣いていた。誰かそばにいたら、感激のあまりきっと抱き着いたと思う。中華民国のパスポートでも構わない、と帰国に踏ん切りがついた瞬間だった。帰ることを熱心にすすめてくれた蔡さんには本当に感謝したい」と、生真面目な性格そのままに頭を垂れた。

蔡焜燦さんの『台湾人と日本精神』（日本教文社）の出版と、周さんの帰国を祝って乾杯する。蔡さんはビールのグラスを目の上まであげると、「お国のために」と言ってグラスをほした。周さんも、金さんも、私も、「お国のために」と応じた。金さんが、いつごろからか、「お国のために」というのが、蔡さんと私の合言葉になってしまったと、同書の序文に記していたのを思い出す。本当だったんだ.....。

お国のため 日本ではほとんど聞かれなくなってしまった言葉だが、妙なりアリティをともなって私の胸に響いてくる。この宴席にいる人々にとっての「お国」の複雑さは言うまでもない。恐らく私にとっての「お国」が最も単純であろう。日本以外にはないからだ。

蔡さんは同書のあとがきで、

「祖国・台湾よ永遠なれ！」

「かつての祖国・日本よ永遠なれ！」

私は、“二つの祖国” の弥栄を祈り続ける。

と綴っている。こうした歴史を身内に持ちながら、こうした思いを披瀝してくれる人々がいる国は、やはり世界中に台湾しかないであろう。

### 日本を恨んだことがありますか？

周さんは、一九三三年(昭和八年)に福岡県八幡市に生まれている。十人兄弟の八番目で、父親は鉄道省の技官だったという。戦前に台湾から日本にやってきた周家は、せつかく内地で生活の基盤を築きながら、日本の敗戦で台湾に帰ることになる。英明少年は小学六年生だった。「いまで言う帰国子女みたいなものだね」と笑うが、帰り着いた台湾で見たものは、国民党政権による暴虐と圧政、搾取だった。父親が台北で職を見つけることができなかつたために各地を転々とし、台湾島南部の高雄にやっと落ち着くことができた頃、周さんは、知識人を中心に三万人の台湾人が虐殺されたとされる「二・二八事件」の処刑現場に遭遇する。一九四七年(昭和二十二年)のことである。

「高雄の駅前広場でね、学校の帰りだったかな、人だかりがしてい

て、ちょうど死体を片付けた直後だったと思うけれど、血が真っ赤な海のように地面に広がっていて...とても怖かった」

少年の目に焼き付けられた凄惨な光景は、その後の周さんに「中国的なもの」への強烈な違和感、いや嫌悪を抱かせることになった。中国的なものを否定したとき、自分には何が残っているか。それが周さんにとって、台湾人とは何か、を問う契機ともなった。

台湾人のアイデンティティーとは何か。周さんの祖先は、他の多くの台湾人と同じように、数百年前に大陸からやってきた漢民族である。

蔡焜燦さんの前掲『台湾人と日本精神』によれば、大陸からやってきた漢民族はその後、台湾島に暮らす南方系原住民と混血しながら独自の文化を築き上げ、民族性を育んできた。そして、いまからおよそ百年前、日本統治時代の五十年間に受けた教育によって、中国人とは異なる倫理観を会得した民族が“台湾人”だという。

それでは台湾人と中国人の決定的な差異は何か。蔡さんはこう記している。

「『公』という観念の有無だ、と思う。日本の教育は、台湾人に他の近代国家と伍して恥じない最高水準の道徳を身につけさせてくれた。日本統治時代の道徳教育こそが、台湾人と中国人を精神的に分離させたのである。日本統治時代、『公』という観念は徹底的に教え込まれた。それは秩序ある法治社会を築き上げるためには必要不可欠な倫理だった」

蔡さんは十八歳まで日本人だった。

十二歳まで日本人だった周さんに、この旅の途中、思い切って、

「日本を恨んだことがありますか？」とたずねたことがある。

「日本の統治時代のことなら、恨んでませんよ。それがなかったら、台湾の発展の基礎はなかったと思っています」

周さんは、蔡さんと同じような日本統治時代の評価を淡々と語ったうえで、

「それよりも、怒りというか、情けない思いを感じるのは、いまの日本に対してですよ」と少しだけ語気を強めた。温和な周さんが、笑みを絶やすことは滅多にないが、いまの日本に関して口を開くときだけは厳しい表情になる。

台湾人のアイデンティティーの形成に、大きな影響を与えたかつての日本。いまの日本をそれに引き比べられると、司馬さんではないが答えに窮するほかない。

## 李登輝さんと武士道精神

八月二十九日。朝から雨。李登輝前総統を訪ねて車で淡水の台湾総合研究所に向かう(李登輝さんは総統退任後、この研究所の

所長を務めている)。

周さんの帰国挨拶ということで事前に約束してあったのだが、研究所に着いたとき李登輝さんの姿はなかった。桃園の自宅で待っておられるという。金さんが電話で直接李登輝さんと話して、間に入った関係者に連絡ミスがあったことが分かった。その際、ごくごく内輪の訪問ということだったのを、金さんが日本で新聞記者をしている年若い友人を連れていってもいいか、と聞いてくれた。

李登輝さんの返事は、「OK」だった。これはひとえに金さんのお陰である。数年前、アジア・オープンフォーラムの取材で総統府に李登輝総統を表敬訪問したことがあるが、それとは比べものにならない貴重な機会だ。

李登輝・曾文恵ご夫妻の自宅に着いたのは昼近く。前総統夫妻は、周・金夫妻と麻那さん、私の四人を驚くほど気さくな眼差しで迎えてくれた。

周さんは初対面となる李登輝さんに、「総統の進めてくれた民主化、自由化のお陰で帰ってくることができました」と緊張と感激の面持ちで挨拶した。

「よく帰ってきてくれました。四十年間、大変でしたね」と手を差し伸べた李登輝さんの笑顔は忘れ難い。本当に、わがことのような喜びの表情だった。この人は、親愛感を惜しむことがない。

昼食を御馳走になりながら、周さん、金さんと前総統夫妻との歓談の場に陪席させていただいた数時間は、微妙な政治問題から、人生論、死生観、歴史観など多岐にわたる話題で盛り上がった。会話はほとんどが日本語である。李登輝さんも、周さんも、知的根幹としての教養の体系が日本語で確立されている。

そういえば、黄昭堂さんが李登輝さんについて、「北京語のスピーチをさせたら場持ちするのは三十分ぐらい、台湾語なら一時間、日本語なら際限がない」と表したことがある。私はそれを目の当たりに確認していた。

「そうそう」という相槌が何とも誠実で、年若い孫のような記者の話にも耳を傾けてくれるその姿は、ついこの間まで台湾の元首だったことを忘れさせてしまうような不思議な雰囲気醸していた。司馬さん風にいえば、紛れもなく“人たらし”である。

李登輝さんと金美齡さんについて、表面的な立場の違いを超えて“見事に”台湾に対する真意が符合した九六年の総統選挙について触れておきたい。あのとき金さんは、台湾独立派でありながら、国民党候補の李登輝さんへの支持を表明した。民進党から独立運動の老闘志、彭明敏・元台湾大学教授が出馬しているにもかかわらず、である。

金さんは、国民党主席であっても李登輝さんの本心は「台湾独立」にあると見ていた。金さんは独立運動の同志から、「裏切り者」と呼ばれることもあったという。李登輝さんが、少なくとも言葉のうえでただの一度も「台湾独立」論を口にしたことがなかったことを考えれば、それも当然だったかも知れない。

だが、結党の自由すらなかった戦後の台湾において、政治を変えてゆこうという志のある者は、国民党に身を置いて、内側からの改革をめざすしかなかったという一面もあったろう。李登輝さんの志に、金さんは賭けたのである。民主化、自由化を進めながら、軍事的恫喝を繰り返す大陸中国と対峙するには、誰が指導者でなければならないか。台湾の命運を担えるのは誰か。

「李登輝に力を与えなければ」と金さんは思った、という。選挙による民意の支持という力である。結果として李登輝さんが全得票の五四%を獲得、彭明敏さんの二%と合わせて七五%の台湾人が「独立」ないし「自立」を目指していることを鮮明に示した。独立派から見て「裏切り者」と呼ばれた金美齡さんと、統一というスローガンを捨てない国民党にあって、いつの間にかそれとは違う道筋に台湾を導いてきた李登輝さんの選択は、ここに結実した。台湾人同士の阿吽の呼吸、と言ってよいのかも知れない。

金さんは、当時の李登輝さんについて、司馬遼太郎さんにたずねたそうである。

「彼は本気でしょうか？」

「彼は本気です。死んでもいいという覚悟でやっています」

金さんはこれで決意した、という。

李登輝さんが日本からの訪問客に、「これが私の愛読書です」と言って、新渡戸稲造の『武士道』を渡すことがあると人づてに聞いたのは数年前だが、李登輝さん自身、その『武士道』や『葉隠』を愛読しつつ、そこから死生観を確立していったことを今回改めて知った。

司馬さんに、「二十二歳まで日本人だった」と語った李登輝さんはまた、深田裕介さんに、「日本人がその理想を注ぎ込んで育成したのが私という人間なんです」と語ったことがある。

熱心なクリスチャンでありながら、それと矛盾することなく武士道に裏打ちされた日本精神を結晶させたような人が李登輝さんなのだ。こんな受け止め方は、あまりに単純で、あまりに陳腐だろうか。

だが、実感として、こんな人には日本で出会ったことがない。

## 高雄、台南へ...

八月三十日。夜。周さんの親戚による歓迎会。当たり前なのだろうが、台湾語を話す周さんの表情がどんどん生き生きとしてくるのが分かる。言葉に連なる、血に連なる故郷に、溶け込んでゆく周さんを傍らで見ていて実感する。四十年間の空白が、少しずつ埋められていっているのだろうか。

八月三十一日。周さんのご両親の墓参りに同行する。新店の基督教安康墓園。小高い丘の斜面につくられた墓地で、その中腹あたりに周家のお墓はあった。私は邪魔にならないように写真を撮る。四十年ぶりの献花。墓誌を確認すると、周さんは長い不在を詫びるかのように頭を垂れた。涙が目尻からこぼれそうになっているのを、私は見ないようにした。

夜、台北市内の国賓大飯店で催された台湾安保協会主催の「周英明博士の帰国を歓迎する会」に招かれる。同協会の理事長は黄昭堂さん、副理事長は蔡焜燦さんである。台湾各界から百名を超える人々が駆けつけ、周さんと卓を囲んでいる。

「周さんは浦島太郎で、金さんは乙姫様。初めて二人そろって台湾に“新婚旅行”にやってきた」。司会を務めた蔡さんが、またユーモ

アたっぷりの挨拶で会場の拍手と爆笑を誘った。

九月一日。

「弥次喜多道中、頑張ってるね」

金さんが講演のため一足早く日本に帰ってしまう。すでに麻那さんも、仕事の都合で三日目の午後には日本に帰っていった。台北での帰国の挨拶を終え、いよいよ本格的な、周さんのセンチメンタル・ジャーニーである。

昼過ぎ、台北駅から南部の高雄をめざして、台湾国鉄自慢の急行「自強号」に乗り込む。九州とほぼ同じ大きさの台湾は、海岸沿いの都市を結ぶ鉄道網が完備していて、全島を一周する幹線のほか、数カ所の盲腸路線(行き止まり路線)がある。私たちの乗ったのは西部幹線(山線)を走る便で、雪山山脈、玉山山脈を遠く左手に見ながら進んでゆく。

車中で弁当を買う。台中を過ぎてしばらくすると北回歸線を越える。冷房のきいている車中とはともかく、外はさすがに暑そうだった。車窓の風景は、日本の地方都市に似ている。違うのはサトウキビ畑の広がりだ。バナナの栽培畑もある。

周さんは黙って外を眺めている。高雄が近付くにつれ、少年時代の記憶を手繰るように、場所について語りだす。山や川の位置などである、あるものは外れていて、あるものは当たっていた。

高雄駅に「自強号」が滑り込む。四時間半の旅だった。熱気のように高雄の駅頭に立つ。周さんの少年時代を過ごした街。いまは台北に次ぐ台湾第二の都市である。工業都市としては第一で、人口は都市部だけで百五十万人に近い。駅前広場に出ると、周さんはしばらくたたずんだ。夕方の通勤通学ラッシュで、たくさんの人々がせわしなく行き来している。

## 若くして逝った親友

周さんから聞かされた「二・二八事件」の処刑の話を出す。

「変わってない。あそこです」

周さんは、流血の現場だった広場の一角を指さす。多感な少年期を過ごしたであろう高雄は、周さんにとって最も思い出深い街なのだろう。駅の近くに建つ周さんの母校、高雄中学を訪れる。校門の守衛に断って、周さんは放課後の構内を歩き回った。グラウンド、図書館、サークル棟など...、変わったもの、変わらないもの、ひとつひとつを確認するように周さんは視線を走らせる。

「ここにはね、いっぱい思い出があるんですよ」

高雄中学を出てから駅の横手に伸びる通り沿いに、かつての住まいの名残を探す。私も周さんについて歩く。当時の面影はまるでない、らしい。なかなかそれらしい所へ行けない。とにかく歩き回る。台北と同じで、ここでもミニバイクが、狭い道であろうがお構いなしに結構な勢いで行き来している。

その夜、ホテルに周さんの旧友が訪ねてきた。周さんにとって忘れることのできない無二の親友の弟さんだった。親友は、すでに亡くなっている。遠い昔、高雄中学の同級生だった人である。一緒に日本留学しようと語り合っていた友は、しかし、それを果たすことなく二十代半ばで病に倒れた。台湾大学を同期で卒業し、同時に兵役にも就いた仲。周さんは空軍に配属され、親友は金門島に派遣された。親友はほどなく胃ガンにかかり除隊、台湾大学の付属病院に入院していたが、帰らぬ人となった。

「そのときのショックと言ったらなかった。こんなに若いのになぜだあって。あのときの悲しみと怒りの入り交じった思いはいまも忘れられません」

高雄中学から台湾大学工学部の電気科に進んだ周さんは、法学部政治学科に進んでいた親友と、青春の夢を分かち合っていた。周さんは、まだ政治活動に足を踏み入れてはいない。もちろん、国民党政権による台湾人支配に対する怒りがなかったわけではない。

「その当時は、本当に怖かったです。政治活動をやっている者がある日ふっと学校に来なくなる。そして、そのうち消息が知れなくなる。そんなことが珍しくなかった」

周さんは、親友の分まで頑張ろうと、懸命に勉強し、やがて東京大学への留学を果たす。わが国文部省の試験を突破しての留学だった。台湾大学の助手をしながら、家庭教師の口を十数件も掛け持ち、離日のときには、両親が年老いても困らぬようにと家賃収入を見込んで小さいながらも一戸建ての家を買っている。勉学の一方で働きづめの毎日でもあった。

日本での学費・生活費は文部省から支給された。月額二万五千元だった。当時の大学初任給の二倍という結構な額だった。来日して数カ月が経った頃、黄昭堂さんら日本国内で台湾独立運動に取り組む学生仲間と出会う。刺激は受けたが、それに飛び込むまでには至らなかった。

それがなぜ、以後四十年間もそれに深く関わるようになったのか。

あるとき中華民国大使館から呼び出された周さんは、独立運動の動向を探って通報してくれれば、月額で八〇米ドルくれると持ちかけられた。文部省の支給額よりも多少高い程度だった。

大使館の手先、“特務学生”にはなれなかった。「人間をなめるのもいい加減にしろ」という思いがふつつつ湧き起こってきた。反政府的人間と見なされても構わない。周さんは、この一事を切っ掛けに、台湾独立運動に飛び込んでいく。

「正直言えば、政治運動は怖かったけれど、もうやるしかないと思った」

台湾人としてのこだわりを殉じて生きる人生が、そのとき始まったといってよかった。台湾独立建国連盟の機関紙『台湾青年』に周さんは筆をふるうようになる。代表の黄昭堂さんに何ができるのかとたずねられて、周さんは「小説を書く」と答えた。文筆による闘いを挑むことにしたのだ。

筆名を「孫明海」とした。私はてっきり孫文の一字から連想して付けたのだろうと思ったのだが、違っていた。

「死んだ親友の名前が、孫大川と言うんです。一緒に日本に来るこ

とを夢見ながら果たせなかった彼の名前から取ったんです。大川の分まで頑張ろう、そう思いました」

往時を懐かしむ眼差しの周さん。孫大川さんの弟さんとの会話を横で聞きながら、私は見知らぬ台湾人の、いくつものドラマに思いを馳せた。独立運動に身を投じて、四十年も故国に帰らなかった周さんのような人生は稀だろう。だが、濃淡の差こそあれ、台湾人に共通の物語がそこにはある。孫大川さんもまた、生きて日本留学していれば、自らの恐怖心と闘いながら、周さんとともに独立運動に関わったかも知れない。

九月二日。四十年前、周さんが両親のために購入した家を見に行く。周さんの不在の間、親戚がずっと管理してくれていたという。廃屋同然のたたずまいだったが、周さんには“宝物”のように映っていたのではないかと思う。資産の保全を確認できたことよりも、かつての思い出の光景が、壊れずに目の前に現れてくれたことへの喜びである。

昼。街中の飯屋で周さんと“魚丸湯”を食す。魚のすり身のスープだ。

「日本からの引き揚げ船で基隆の港に着いたとき、市場で初めて口にしたのがこれです。“内地”は食糧がなくて空腹が辛かったけれど、台湾は豊かだったんですね。何ということもないスープだけでも、“こんな美味しいものがあるのか”といまから思えば滑稽なほど、あのときは感激した。私にとってこの味は台湾という国への愛情の原点なんです」

夕方。台南市に向かう。

許文龍さんのご自宅で周さんの帰国歓迎の宴。玄関に入った途端、ヘンデルの「歓喜の歌」に迎えられる。許文龍さん自らバイオリンを奏でられている。

「お帰りなさい、周さん。よくいらっしゃいました」

女性から花束が手渡される。粋な演出だった。“許文龍楽団”の心のこもった合奏が終わるまで、周さんはほぼ直立不動で、こぼれる涙を拭わなかった。

許文龍さんは一九二八年(昭和三年)台南市生まれ。日本統治時代の台南高等工業附属工業学校に学び、戦後に卒業。玩具、日用雑貨製造からスタートして、いまは家電製品からコンピューター、自動車などに広く使われるABS樹脂の製造メーカーとして世界一の生産能力とシェアを誇る奇美実業会社のトップである。また総統府政策顧問(現在は資政)として、李登輝前総統の時代から台湾のために力を尽くしてきた。

蔡焜燦さんの言葉をふたたびお借りすれば、李登輝さん、蔡さんに負けず劣らずの“愛日家”であり、台南における後藤新平、新渡戸稲造の業績をフェアに評価する国際シンポジウムを開催したことは記憶に新しい。そのとき許文龍さんは、「私はかつて日本人であったことを誇りに思っていますが、逆に日本の方々には誇りを持っていないんですね。どうか過去に対して正当な評価と自信を持ってください」と日本からの招待客に、日本語で訴えかけている。

食事のあと、許文龍さんの選曲で、夜の更けるまで日本と台湾の

唱歌を何曲も歌った。私の知らない古い歌もたくさんあって、逆に教えられる始末だった。

九月三日。許文龍さんが私財を投じて設立した「奇美博物館」を周さんと一緒に見学。日本で言えば倉敷にある大原美術館のような施設だろうか。

九月四日。台南から空路、台北に戻る。明日の夜、日本に帰る予定だ。

## 日本の近代と台湾人の物語

周さんのセンチメンタル・ジャーニーに同行することで、私は多くの台湾人の物語に思いを馳せることができたように思う。「台湾の歴史は、また日本の近代史でもある」と語る蔡焜燦さん。日本統治時代を生きた台湾人の多くが、その時代を評価してくれている。周さんが日本を「恨んでいない」と言うのを、私は痛みと、気恥ずかしさと、いくぶんかの矜持の入り混じった感覚で受け止めた。

「本当のところ、私は何国人だかよく分からない。台湾人として生きてきたけれど、日本人だった時代が、私のある部分を形づくっているのは間違いない。アイデンティティーの問題を真剣に考えれば考えるほど、厄介な迷路に入ってしまう。とって地球市民などという抽象的なものにもなれない」

周さんは苦笑いを浮かべる。自分の内奥の「お国」は単純に規定できない。自分は何者であるかという問いの答えが、結局は自分の連なる歴史の中にしか存在しないとすれば、周さんのように日本統治時代を経験している世代が、その内部に日本を抱えるのは自然なことなのかも知れない。

蔡焜燦さんは言う。

「どうぞ心に留めていただきたい。“日本”は、あなた方現代日本人だけのものではない、我々“元日本人”のものでもあることを」（『台湾人と日本精神』）

九月五日。日本に戻る。

周さんは出国審査でまた一苦労しなければならなかった。「無事通行」はいつの日になるのか。間近なのか、それともまだ遠いのか。ともあれ、周さんと私の乗った飛行機は台湾を離れた。

**周 英明氏** 昭和八年(一九三三年)福岡県生まれ。台湾大学工学部電気科卒。昭和三十六年、留学生として来日。東京大学工学系大学院博士課程修了。五十八年、東京理科大学教授。平成八年、同大理工学研究科長、社団法人プリント回路学会会長。来日後、台湾独立運動に関わる。昭和六十年以来、月刊『台湾青年』発行人

産経Webに掲載されている記事・写真の無断転載を禁じます。すべての著作権は  
産経新聞社に帰属します。(産業経済新聞社・産経・サンケイ)  
Copyright2000,TheSankeiShimbun.

---